

ない。上陸のため船のタラップを下りると、婦人会のたすきをかけた地元的女性たちが、甲斐甲斐しく立ち働いて

無職 山口 映子 74

ある夜、姑の悲鳴で飛び起きた。寝室に行き、「お母さんどうしたの。お母さんお母さん」と呼ぶと、やっと気がついたらしく「焼夷弾が雨のように落ちる中、逃げ回っていたの。怖くて怖くて、もっと早く起こしてくれればよかったのに」と震えていた。

姑は一九四五年三月十日の東京大空襲で墨田区の店も家も焼かれ、生活の基盤を失った。自分は留守にしておき、三女は無傷だったが、次女が大やけどを負った。八歳の息子は疎開していて

令和元年の終戦の日です。先人たちが汲み上げた「平和憲法の清流を源に、時代の新しい流れがまた巡ります。私たちの不戦の意志を推力にして。

昭和二十年八月十五日。東京都心の社交クラブで玉音放送を聞いた帰り道。その紳士は、電車内で男性の乗客が敗戦の無惨をあげつらう怒声にじっと聞き入ります。「一体(俺たちは)何のために戦ってきたんだ」

映画のシーンです。実在の紳士は幣原喜重郎。当時七十二歳。この二カ月後、首相となつて日本国憲法の成り立ちに深くかかわってきます。

不戦の源流を遡る

連合国軍の占領下、天皇制の存続と一体で「戦争放棄」を日本側から発意したとされる。憲法のいわゆる「押しつけ論」に有力な反証をかさず、あの入です。

引き

れから七十四年となるが、「昭和ひと桁っ子」である私が、次世代に語り継ぎたいひとことである。

難を逃れた。私の主人である。疎開せずにいた同級生は皆死んだぞうだ。現在の地に移り住んだのは主人が中学二年の時。お金も食べ物もなく、空腹で夜も眠れぬ中、僅かな食料を寝る前に食べたぞうだ。息子の高校卒業まで、歯を食いしばる母を見て育った主人は、働きつめの生涯だった。

病で死ぬ前、主人は私に話してくれました。おなかですいて仕方なかった時、ポロッと母に言ったら、「男は食べ物とを争うべし言わないの」と一喝されたという。その時の姑と主人の心を思つと、胸が痛む。

空襲の夢にうなされた姑

社説にも何度か登場しました。「またか」とおっしやる向きもありましょう。けれども今回は故意論争の皮相から離れ、より深くにある幣原の平和観に迫りたい。

2019・8・15

社説

憲法の下令和は流れる

終戦の日に考える

野に叫ぶ民の思い

元有志の実行委員会を率いる酒井則行さんと戸田伸夫さんが、事業の意義を語ってくれました。既に七月、撮影終了。DVDにして今秋にも公開予定とか。

「私たちがこの映画で、昨今の改憲論争にくみしたり『九条を守れ』と訴えたいわけでは決してありません。二人が口をそろえて強調したことです。

幣原の「戦争放棄」は思い付きや駆け引きからではない。もっと人生の深みから湧き出た、純粋な平和観なのだ。その歴史的な価値を絶やすことなく後世につないでいかねば、ということなのです。

「地元でもあまり知られていなかった元首相の、高潔な理想を後世に伝えるため、まずは名前の読み方から知ってもらおうと。多くの人に平和を考えるきっかけを届きたい」。元教諭や税理士など地



無職 田口 正男 93

戦後七十年以上も平和な生活に慣れ親しんできた私にとって、東村山での軍隊生活は、今でも苦い思い出として脳裏によみがえってくる。

通信を担う下士官の養成機関だったが、毎日上官から牛馬のごとく扱われた。命令には絶対服従で、一人でも背けば連帯責任としてビンタや殴打がとんでくる。

モリス信号の教育や銃かつぎの訓練など、私たち兵隊は殊の外厳しく、しごき抜かれた。三度の食事もあてが

空襲

時は怖いと思つもの、といった普通の感情が麻痺する戦争の恐ろしさを、彼女たちの経験から知ることができた。

しごき抜かれた兵隊時代

いぶちで文句は言えない。いつも満たされぬすきつ腹を抱えたまま毎日、実戦同様の訓練へ追い回され、息つく暇もない。それは残酷なものだった。今でも、ひどかった軍隊生活を思い出した時に胸が痛む。

戦後、私たちは平和な暮らしを謳歌し、安らかな日々を送っている。そして、これからも自由を満喫し、平和な生活を持続していきたい。もつあの戦争の苦しみをまっぴらごめんである。まだまだ長生きをし、平穏無事に、元気いっぱい体を動かし、好きなことをしたいと思っている。

「原爆はやがて他国にも波及するだろう。次の戦争で世界は亡びるかも知れない」

「悲劇を救う唯一の手段は(世界的な)軍縮だが、それを可能にする突破口は自発的戦争放棄国の出現以外ない」

「日本は今その役割を果たしている位置にある」

平和の理想つなげ

幣原の「戦争放棄」は、後世の人類を救うための「世界的任務」でもありました。源にあったのは高潔なる平和の理想です。七十四年が過ぎました。いま令和の時代を受け継ぐ私たちが、いまこの源から享受する不断の恵みがあります。滔々たる平和憲法の清流です。幣原の深い人類愛にも根差した不戦の意志を、令和から次へつなぐ流れです。